

監修

佐佐木信綱
柳田國男
新村
山田孝雄
出
津田左右吉
和辻哲郎

枕 冊 子

田中重太郎校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

日本古典全書

「枕冊子」 田中重太郎校註

昭和二十二年六月二十五日初版發行

昭和三十一年五月十五日第六版發行

印刷所 圖書印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

區有樂町・大阪市北區中之島・

小倉市砂津・名古屋市廣小路）

定價 四〇〇圓

解 年 系 凡 本

目 次

説	一		
清少納言の世界	三	原形とその成立・内容	三
作者と時代	八	諸本と底本	三〇
書名	一六	影響と研究史	三〇
表			三〇
譜			三〇
例			三〇
文			三〇
一 春はあけぼの	七一	九 よろこび奏すること	六六
二 ころは	七三	一〇 新内裏の東をば	六六
三 正月一日は	七三	一一 山は	六七
四 おなじことなれども聞き耳ことなるもの	七六	一二 市は	六七
五 思はむ子を法師になしたらむこそ	七七	一三 峯は	六七
六 大進生昌が家に	七七	一四 原は	六八
七 うへにさぶらふ御猫は	八三	一五 淵は	六八
八 正月一日、三月三日は	八五	一六 海は	六八
		一七 みささぎは	六八

一八	わたりは	八九	三七	せちは	三
一九	たちは	八九	三八	花の木ならぬは	一三
二〇	家は	八九	三九	鳥は	二六
二一	清涼殿の丑寅の隅の	八九	四〇	あてなるもの	二六
二二	生ひ先なくまめやかにえせざいはひ	九	四一	蟲は	一元
二三	など見てゐたらむ人は	九	四二	七月ばかりに、風いたう吹きて	一三〇
二四	すさまじきもの	九	四三	にげなきもの	一三〇
二五	たゆまるるもの	一〇	四四	ほそ殿に人あまたあて	一三
二六	人にあなづらるるもの	一〇	四五	主殿司こそ	一三
二七	にくきもの	一〇	四六	をのこは、また、隨身こそ	一三
二八	心ときめきするもの	一〇	四七	職の御曹司の西面の立部のもとにて	一三
二九	過ぎにしかた戀しきもの	一〇	四八	馬は	一七
三〇	心ゆくもの	一〇	四九	牛は	一七
三一	檳榔毛は	一七	五〇	猫は	一七
三二	説經の講師は	一七	五一	雑色・隨身は	一七
三三	菩提といふ寺に	一〇	五二	小舎人童	一六
三四	小白河といふところは	二二	五三	牛飼は	一六
三五	七月ばかりいみじう暑ければ	二六	五四	殿上の名對面こそ	一六
三六	木の花は	二九	五五	若くよろしき男の	一六
	池は	三〇	五六	若き人・ちごどもなどは	一四〇

五七	よき家の中門あけて……………	一四〇
五八	瀧は……………	一四二
五九	川は……………	一四二
六〇	曉に歸らむ人は……………	一四三
六一	橋は……………	一四三
六二	里は……………	一四四
六三	草は……………	一四四
六四	草の花は……………	一四四
六五	集は……………	一四七
六六	歌の題は……………	一四七
六七	おぼつかなきもの……………	一四七
六八	たとしへなきもの……………	一四八
六九	しのびたるところにありては……………	一四八
七〇	縣想人にて來たるは……………	一四九
七一	ありがたきもの……………	一五〇
七二	内裏の局、ほそ殿、いみじうをかし……………	一五二
七三	まいて、臨時の祭の調樂などは……………	一五三
七四	職の御曹司におはしますころ、木 立など……………	一五四
七五	あちきなきもの……………	一五五

七六	こちよげなるもの……………	一五五
七七	御佛名のまたの日……………	一五六
七八	頭の中將のすずろなるそら言を聞き て……………	一五六
七九	かへる年の二月二十餘日……………	一六三
八〇	里にまかでたるに……………	一六六
八一	もののあはれ知らせがはなるもの……………	一六九
八二	さて、その左衛門の陣などに行きて後……………	一六九
八三	職の御曹司におはしますころ、西の 廂に……………	一七〇
八四	めでたきもの……………	一八一
八五	なまめかしきもの……………	一八四
八六	宮の五節出ださせたまふに……………	一八五
八七	細太刀に平緒つけて……………	一八七
八八	内裏は五節のころこそ……………	一八八
八九	無名といふ琵琶の御琴を……………	一九九
九〇	上の御局の御簾の前にて……………	一九二
九一	ねたきもの……………	一九三
九二	かたはらいたきもの……………	一九四
九三	あさましきもの……………	一九四

九四	くちをしきもの……………	一五	一二二	繪にかきおとりするもの……………	三三
九五	五月の御精進のほど……………	一六	一二三	描きまさりするもの……………	三三
九六	職におはしますころ……………	一四	一四	冬は……………	三三
九七	御かたがた、君達、上人など……………	一五	一五	あはれなるもの……………	三三
九八	中納言殿まゐりたまひて……………	一六	一六	正月に寺にこもりたるは……………	三四
九九	雨のうちへ降るころ……………	一七	一七	いみじう心づきなきもの……………	三〇
一〇〇	淑景舎、東宮にまゐりたまふほどのことなど……………	一八	一八	わびしげに見ゆるもの……………	三二
一〇一	殿上より、梅のみな……………	一九	一九	暑げなるもの……………	三二
一〇二	二月つごもりごろに……………	二〇	二〇	はづかしきもの……………	三三
一〇三	はるかなるもの……………	二一	二一	むとくなるもの……………	三三
一〇四	方弘は……………	二二	二二	修法は……………	三三
一〇五	見苦しきもの……………	二三	二三	はしたなきもの……………	三四
一〇六	いひにくきもの……………	二四	二四	關白殿、黒戸より出でさせたまふとて……………	三五
一〇七	關は……………	二五	二五	九月ばかり、夜一夜降り明かしつる雨の……………	三七
一〇八	森は……………	二六	二六	七日の日の若菜を……………	三七
一〇九	原は……………	二七	二七	二月、官の司に……………	三六
一一〇	四月のつごもりがたに、初瀬にまうでて……………	二八	二八	頭の辨の御もとより……………	三六
一一一	つねよりことにきこゆるもの……………	二九	二九	などて官得はじめたる六位の笏に……………	三四〇
		三〇	三〇	故殿の御ために……………	三四一

一三一	頭の辨の、職にまゐりたまひて……………	二四二	一五〇	むつかしげなるもの……………	二六六
一三二	五月ばかり、月もなういと暗きに……………	二四二	一五一	えせものところ得るをり……………	二六七
一三三	圓融院の御はての年……………	二四七	一五二	苦しげなるもの……………	二六七
一三四	つれづれなるもの……………	二五〇	一五三	うらやましげなるもの……………	二六八
一三五	つれづれなくさむもの……………	二五〇	一五四	とくゆかしきもの……………	二七〇
一三六	とりどころなきもの……………	二五一	一五五	心もとなきもの……………	二七一
一三七	なほめでたきこと……………	二五一	一五六	故殿の御服のころ……………	二七三
一三八	殿などのおはしまさで後……………	二五五	一五七	宰相の中將齊信・宣方の中將・道方 の少納言などまゐりたまへるに……………	二七五
一三九	正月十餘日のほど、空いとくろう……………	二六〇	一五八	むかしおぼえて不用なるもの……………	二八一
一四〇	清げなる男の雙六を……………	二六一	一五九	たのもしげなきもの……………	二八一
一四一	碁を、やむごとなき人のうつとて……………	二六一	一六〇	讀經は……………	二八二
一四二	おそろしげなるもの……………	二六二	一六一	近うて遠きもの……………	二八三
一四三	清しと見ゆるもの……………	二六三	一六二	遠くて近きもの……………	二八三
一四四	いやしげなるもの……………	二六三	一六三	井は……………	二八三
一四五	胸つぶるもの……………	二六三	一六四	野は……………	二八三
一四六	うつくしきもの……………	二六三	一六五	上達部は……………	二八三
一四七	人ばへするもの……………	二六五	一六六	君達は……………	二八三
一四八	名おそろしきもの……………	二六五	一六七	受領は……………	二八四
一四九	見るにことなることなきものの文字 に書きてことごとしきもの……………	二六六	一六八	權の守は……………	二八四

一六九	大夫は……………	二六四	ばかりなるに……………	三〇三
一七〇	法師は……………	二六四	大路近なるところにて聞けば……………	三〇四
一七一	女は……………	二六四	ふと心おとりとかするものは……………	三〇五
一七二	六位の藏人などは……………	二六五	一八九 宮仕人のもとに來などする男の……………	三〇六
一七三	女の一人住むところは……………	二六五	一九〇 風は……………	三〇七
一七四	宮仕人の里なども……………	二六六	一九一 野分のまたの日こそ……………	三〇八
一七五	あるところになにの君とかやいひける人のもとに……………	二六六	一九二 心にくきもの……………	三〇九
一七六	雪のいと高うはあらで、うすらかに降りたるなどは……………	二六九	一九三 島は……………	三一二
一七七	村上の前帝の御時に……………	二九〇	一九四 濱は……………	三二三
一七八	御形の宣旨の……………	二九一	一九五 浦は……………	三二三
一七九	宮にはじめてまゐりたるころ……………	二九二	一九六 森は……………	三二三
一八〇	したりがほなるもの……………	二九六	一九七 寺は……………	三二四
一八一	位こそなほめでたきものはあれ……………	二九六	一九八 經は……………	三二四
一八二	かしこきものは乳母の男こそあれ……………	三〇〇	一九九 佛は……………	三二四
一八三	病は……………	三〇一	二〇〇 書は……………	三二四
一八四	すきずきしくて獨住する人の……………	三〇二	二〇一 物語は……………	三二五
一八五	いみじう暑き晝なかに……………	三〇三	二〇二 陀羅尼は……………	三二五
一八六	南ならずは、東の廂の板のかげ見ゆ……………	三〇四	二〇三 あそびは……………	三二五
		三〇五	二〇四 あそびわざは……………	三二五
		三〇五	二〇五 舞は……………	三二六

二〇六	彈くものは……………	三六	二二五	三條の宮におはしますころ……………	三三
二〇七	笛は……………	三六	二二六	御乳母の大輔の命婦……………	三三
二〇八	見るものは……………	三八	二二七	清水にこもりたりしに……………	三三
二〇九	五月ばかりなどに山里にありく……………	三三	二二八	むまやは……………	三三
二一〇	いみじう暑きころ……………	三三	二二九	社は……………	三三
二一一	五月四日の夕つかた……………	三三	二三〇	一條の院をば新内裏とぞいふ……………	三七
二一二	賀茂へまゐる道に……………	三四	二三一	身をかへて天人などはかうやあらむと見ゆるものは……………	三八
二二三	八月つごもり、太秦にまうづとて……………	三四	二三二	雪高う降りて、いまもなほ降るに……………	三九
二二四	九月二十日あまりのほど……………	三五	二二三	はそ殿の遣戸をいとうおしあげたれば……………	三九
二二五	清水などにまゐりて……………	三五			
二二六	五月の菖蒲の……………	三六	二三四	岡は……………	三〇
二二七	よくたきしめたる靈物の……………	三六	二三五	降るものは……………	三〇
二二八	月のいと明かきに……………	三六	二三六	日は……………	三〇
二二九	大きにてよきもの……………	三六	二三七	月は……………	三一
二二〇	短くてありぬべきもの……………	三七	二三八	星は……………	三一
二二一	人の家につきづきしきもの……………	三七	二三九	雲は……………	三一
二二二	ものへ行く道に……………	三七	二四〇	さわがしきもの……………	三一
二二三	よろづのことよりも、わびしげなる車に……………	三八	二四一	ないがしろなるもの……………	三一
二二四	はそ殿に便なき人なむ隣に……………	三八	二四二	ことばなめげなるもの……………	三一

二四三	さかしきもの……………	三三	るついでなどにも……………	三五
二四四	ただ過ぎに過ぐるもの……………	三三	關白殿、二月二十一日に法興院の積	
二四五	ことに人に知られぬもの……………	三四	善寺といふ御堂にて……………	三八
二四六	文のことばなめき人こそ……………	三四	たふときこと……………	三七
二四七	いみじうきたなきもの……………	三五	歌は……………	三七
二四八	せめておそろしきもの……………	三五	指貫は……………	三七
二四九	たのもしきもの……………	三六	狩衣は……………	三七
二五〇	いみじうしたてて婿取りたるに……………	三六	單衣は……………	三七
二五一	世の中になほいと心憂きものは……………	三七	下襲は……………	三八
二五二	男こそなほいとありがたく……………	三八	扇の骨は……………	三八
二五三	よろづのことよりも情あるこそ……………	三八	檜扇は……………	三八
二五四	人のうへをいふを腹立つ人こそ……………	三九	神は……………	三八
二五五	人のかほにとりわきてよしと見ゆる ところは……………	三九	崎は……………	三八
二五六	こたいの人の、指貫着たるこそ……………	三九	屋は……………	三九
二五七	十月十餘日の月のいと明かきに……………	三九	時奏する……………	三九
二五八	成信の中將こそ……………	四〇	日のうらうらとある晝つかた……………	四〇
二五九	大藏卿ばかり……………	四〇	成信の中將は、入道兵部卿の宮の御 子にて……………	四〇
二六〇	うれしきもの……………	四〇	つねに文おこする人の……………	四〇
二六一	御前にて人人ともまたものおほせら ……………	四一	きらきらしきもの……………	四一

二七九 神のいたう鳴るをりに……………三六七

二八〇 坤元録の御屏風こそ……………三六八

二八一 節分違などして……………三六八

二八二 雪のいと高う降りたるを、例ならず……………三六九

二八三 陰陽師のもとなる小童こそ……………三六九

二八四 三月ばかり物忌しにとて……………三九〇

二八五 十二月二十四日、宮の御佛名の……………三九一

二八六 宮仕する人人の出で集まりて……………三九三

二八七 見ならひするもの……………三九三

二八八 うちとくまじきもの……………三九三

二八九 右衛門の尉なりける者の……………三九六

二九〇 小原の殿の御母上とこそは……………三九七

二九一 また、業平の中將のもとに……………三九七

二九二 をかしと思ふ歌を……………三九七

二九三 よろしき男を下衆女などのほめて……………三九八

二九四 左右の衛門の尉を判官といふ名つけ……………三九八

二九五 大納言殿まゐりたまひて……………三九八

二九六 僧都の御乳母のままなど……………四〇〇

二九七 男は女親なくなりて男親の一人ある……………四〇〇

いみじう思へど……………四〇二

ある女房の……………四〇三

便なきところにて……………四〇三

三〇〇 まことにや、「やがては下る」と……………四〇四

一本……………四〇四

一 夜まさりするもの……………四〇四

二 火影におとるもの……………四〇四

三 聞きにくきもの……………四〇五

四 文字に書きてあるやうあらめど……………四〇五

心得ぬもの……………四〇五

五 下の心がまへわろくて清げに見……………四〇五

ゆるもの……………四〇五

六 女の表着は……………四〇六

七 唐衣は……………四〇六

八 裳は……………四〇六

九 汗衫は……………四〇六

一〇 織物は……………四〇六

一一 あやの紋は……………四〇七

一二 薄様色紙は……………四〇七

一三 硯の箱は……………四〇七

補遺

上卷末所載

法師は言すくななる……………四三

女はおほどかなる……………四三

女のおそひは……………四三

中卷末所載

夜居にまありたる僧を……………四三

下卷末所載

一 霧は……………四三

二 出で湯は……………四三

一四 筆は……………四七
 一五 墨は……………四七
 一六 貝は……………四八
 一七 櫛の箱は……………四八
 一八 鏡は……………四八
 一九 蒔繪は……………四八
 二〇 火桶は……………四八
 二一 疊は……………四八
 二二 檳榔毛は……………四九

奥書

二三 松の木立高きところの……………四九
 二四 宮仕所は……………四二
 二五 荒れたる家の蓬深く……………四三
 二六 初瀬にまうでて、局にゐたりしに……………四三
 二七 女房の、まよりまかでは……………四四
 三〇一 この冊子、目に見え、心に思ふことを……………四五

三 陀羅尼は……………四三
 四 時は……………四三
 五 下簾は……………四三
 六 目もあやなるもの……………四三
 七 もののあはれ知りがほなるもの……………四三
 八 めでたきものの人の名につきていふかひなく聞こゆる……………四四
 九 見るかひなきもの……………四四
 一〇 まづしげなるもの……………四四
 一一 はいなきもの……………四五

枕
冊
子

田
中
重
太
郎

解 說

清少納言の世界

平安時代の文藝は、王朝文藝とも呼ばれる。この時代の文藝は、日本文學のなかでもつともよく皇室を描き、もつともおほく宮廷に生きた人によつて書かれてゐる。

清少納言の枕冊子は、王朝文學である。その描く世界が宮廷または貴族の世界にほとんどかぎられてゐることも當然であらう。そこには、當時の諸記録に見える地震・火災・洪水・飢饉・外交・經濟生活・疫病流行などの事實はまつたくといつてよいほどとりいれられてゐないし、貴族の地位獲得の暗闘さへもほとんどあげられてない。この時代の女流日記にも、一般にそれが日記といはれながら、さうした記事をほとんど闕いてゐる。

無論、枕冊子に乞食も出て来る。海女あまの生活もある。下衆げすの逸話もとりあげられてはゐる。だが、それはどこまでも宮廷を中心として描かれた畫面に興を添へる一小點に過ぎない。そして、この冊子の著者が

主上や中宮と「ただ人」とをはつきり區別し、「下衆げすの家に雪の降りたる。また、月のさし入りたる、いとくちをし」(「にげなきもの」と觀じてゐることも、この冊子を一讀せられたらすぐわかることである。清少納言が紫や白や紅くれなゐやを好み、「あてなるもの」としてさうした色彩のものをあげてゐるのも、それらの禁色じんしよ・神聖色の高貴の美を第一としたからである。雪が好きであつたのもおなじく清淨性をたふとんだからである。また、「第一の人にまた一に」とのぞんだのもおなじ意識からだといへるであらう。

しかし、現實において、清少納言の父は一介の受領——彼女が「受領などなるは目もとまらずにくげなる」(「見物は」)といった——に過ぎなかつた。清原元輔は梨壺の五人にかぞへられてはゐたけれども、八十三歳になつてやつと從五位上肥後守にとどまつてゐた。そして少納言自身も内侍にさへなれなかつたのである。その清女は、分をわきまへてはゐたが、中宮定子に侍して、あたかも姉に對するやうに、むしろそれ以上にしたしくのびのびと、自由にふるまつてゐる。その君臣主従の關係は決して人間性をおさへゆがめたり、人格を無視したりするものではなかつた。清女の個性はりつぱに生かされてゐた。そのことは作者の體驗・實感の文學である枕冊子に明らかである。

清少納言が思想家でないことや哲人でなかつたこと、また彼女が知識の木によつてゐたことは事實であらうが、だからといって、その人に人間味がなかつたとか、その人が輕薄な女であつたとかはいへないであらう。むしろ「よろづのことよりもなさけあるこそ、男はさらなり、女もめでたくおぼゆれ」(第二五四段)